

| | |
|------------------|---|
| Title | 『十字架とリンチの木』(ジェイムズ・H・コーン著、梶原壽訳、日本キリスト教団出版局、2014 年、303 頁) |
| Author(s) | 森田, 美千代 |
| Citation | 聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.3, 2015.3 :63-64 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5281 |
| Rights | |



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

『十字架とリンチの木』

(ジェイムズ・H. コーン著、梶原壽訳、日本キリスト教団出版局、2014年、303頁)

森田 美千代

南部の木には奇妙な果実がなる、
葉には血を滴らせ、根にも血を滴らせ、
南部の風に揺らんでいる黒い死体、
ポプラの木から吊るされている奇妙な果実。

—「奇妙な果実」、エイベル・ミアロポール
(別名ルイス・アレン)

本書『十字架とリンチの木』は、James H. Cone, *The Cross and the Lynching Tree* (Orbis Books, 2011) の翻訳書である。

著者コーンは、1938年にアメリカ南部のアーカンソー州にて生まれた。1965年にノースウェスタン大学大学院で、Ph.D.を取得した。1969年に、ニューヨークのユニオン神学校に招聘され、「ラインホルド・ニーバーの後任として、組織神学の講座を受けもってきた」(287頁。「訳者あとがき」から引用)。1987年以降は、チャールズ・ブリッグズ記念名誉教授職にあり、黒人解放神学の第一人者として活躍している。

コーンは、本書『十字架とリンチの木』を、「私の今までの全著作の継続 (continuation) であり、完成点 (culmination) である」と位置づけている (24頁)。このことから、コーンが、本書を、どれだけ力と思いを出して書いたかわかるだろう。コーンのその他の著作としては、以下のようなものがある。

Black Theology and Black Power (Seabury Press, 1969).

A Black Theology of Liberation (Orbis Books, 1970).

The Spirituals and the Blues (Orbis Books, 1972).

God of the Oppressed (Seabury Press, 1975).

Martin & Malcolm & America: A Dream or a Nightmare (Orbis Books, 1991).

翻訳者は、梶原壽氏である。梶原氏は、日本におけるキング研究やコーン研究を牽引してこられた第一人者であった。だから、本翻訳書は、最適任者によって訳されたと言ってよい。しかし、残念なことに、本翻訳書は、梶原氏にとって、地上での最後のお仕事になった。本翻訳書が出版された直後に、天に召されたのである。梶原氏のこれまでのお働きに対して、心より感謝したい。

本書のタイトルは、『十字架とリンチの木』である。すべては、このタイトルに凝縮されている。「十字架とリンチの木」というフレーズが、本書において、リフレインされており、通底音のごとくこだましている。「十字架とリンチの木」、これが本翻訳書のキー・コンセプトである。本翻訳書の帯文は、それを少し敷衍して、いみじくも次のように記している。「『リンチの木』に吊られた何千もの黒人は繰り返し十字架につけられたイエスであった」。それを、さらに敷衍して、コーンは次のように言う。「われわれが十字架とリンチの木を一緒に見ることはできるまでは、すなわちわれわれがキリストを、リンチの木にぶら下がっている『再び十字架につけられた』黒人の死体と同一視することができるまでは、アメリカにおけるキリスト者としてのアイデンティティの真の理解はあり得ない」(23頁)。

上記の「十字架とリンチの木」に関して、コーンは、ニーバーとキングをどのようにとらえているか。二つの章にわたっての、この点に関するコーンの論述は、まさに本書の圧巻であると言ってさえよいだろう。

ニーバーは、十字架についてのキリスト教神学者であった (109頁)。にもかかわらず、ニーバーは、十字架をリンチの木と結びつけることができなかった。いや、結びつけようとしなかった。ニーバーは、建国の父祖たちは奴隷所有者であったにもかかわらず、有徳で尊敬すべき人々であった、と言っ

ている(78頁)。「彼はまた、1896年の連邦最高裁判決の『分離はしても平等』という原理は、『あの時代としては非常によい原理であった』とさえ言っている」(78頁)。「ニーバーは彼の名前が、NAACP[全国有色人向上協会] 法的擁護基金支援委員会(1943年)のために用いられることは許したが、その組織には参加しなかったし、人種的正義の問題を取り扱ういかなる会議にも出席しなかった」(83頁)。「ニーバーは公立学校における人種隔離を終わらせた1954年の連邦最高裁判決を、『黒人革命における第一歩を踏み出したもの』として、称賛した。だが彼は法廷が付け加えた『十分に慎重な速度で』の言葉にも満足した」(78頁)。

一方、キングは、どうであったか。「キングも十字架がキリスト教信仰の規定的核心であると信じていた。しかし、ニーバーと違って、彼の十字架理解は、リンチの木に注意を向けることによって影響を受けていた」(117頁)。

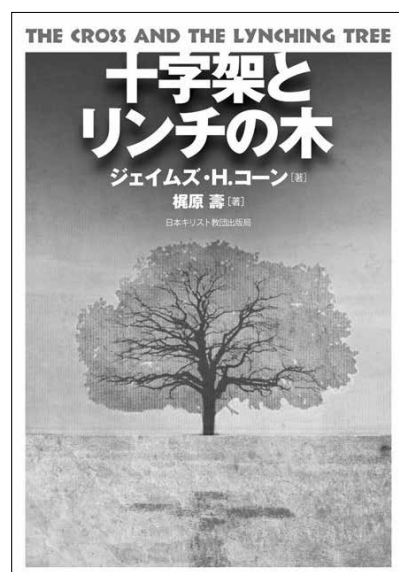
ニーバーとキングとの間には、重要な違いがある。コーンは、「そのことが、なぜキングは公民権運動における殉教者になったが、ニーバーはユニオン神学校のオフィスの安全圏に留まって社会倫理学を教え、正義のための闘いにおいて命を賭けることを決してしなかったかを、部分的に説明している」と言う(118頁)。では、両者の違いとは、何か。それは、「われわれが実現できることはせいぜい『近似的正義(proximate justice)』である」(118頁)とニーバーは考えており、そのように考えるニーバーとは対照的に、キングは「近似的正義」では黒人の状況は変わりようがないと考えていたからであると、コーンは言う(119頁)。

キングとニーバーとの違いは上述したが、コーンは、キングとストークリー・カーマイケルなどの黒人活動家との違いも指摘している。「自由を求める黒人の運動における多くの活動家たちは、キングのイエス信仰を分かちもっていなかった。特にイエスの死の救済力への信仰を分かちもっていなかった。非暴力直接行動を、黒人にとっての、

白人優越主義(white supremacy)と闘う最善の政治戦略(political strategy)として受け入れていながら、彼らはキングの宗教的信仰は拒絶していた」(136頁)。しかし、キングは、カーマイケルなどの黒人活動家も運動に受け入れていた(220頁)。

マルコムXはどうか。多くの人々と違って、コーンは、キングもマルコムXも受け入れたと言っている。「なぜなら、彼らはそれぞれ違った方法で、お互いに補完し合いながら、同一の目標—白人優越主義からの黒人の解放のために闘っていたからである」と言う(26頁)。この指摘は、ある意味で書評者の予想を外れさせるものであり、それゆえに興味深い指摘ともいえる。

最後にコーンは、アメリカ人に次のような注意を喚起して、本書を終えている。「ちょうどドイツ人がホロコーストを決して忘れてはならないように、アメリカ人は奴隷制と人種隔離とリンチの木を、決して忘れてはならない」(239頁)。



『十字架とリンチの木』
ジェームズ・H. コーン：著 梶原 壽：訳
4,104円税込
発行：日本キリスト教団出版局
ISBN978-4-8184-0882-1 C0022

(もりた・みちよ 聖学院大学大学院客員教授)